丹後府中出土貿易陶磁器の数量的検討

上井　佐妃

１．はじめに

現在の京都府北部に位置する宮津市の府中地区は、天橋立によって宮津湾から隔てられた阿蘇海の北側に位置し、北側には成相山、南側には天橋立を望む。府中地区には、丹後国一宮である籠神社や丹後国分寺跡､慶雲元年（704）年創建と伝わる山岳寺院の成相寺など丹後国を代表する寺社が集まっている。丹後国府の有力な候補地の１つであり、天正８年（1580）の宮津城築城まで、丹後の中心地であった。

２．丹後府中と貿易陶磁器

府中地区では複数の発掘調査事例があり、特に 1979 ～ 1983 年にかけて４度にわたる調査が実施された中野遺跡では多量の中世土器が出土したことから、丹後の中世を考える上で欠かせない遺跡とされている。

中嶌陽太郎氏は中野遺跡出土の貿易陶磁器と中世後期の京都産土師器皿の検討をおこなっている。貿易陶磁器の搬入経路は、水澤幸一氏が指摘する日本海流通（水澤 2009）を支持し、11 ～ 12 世紀にかけては日本海ルートを想定するが、13 世紀中頃～ 14 世紀にかけては当該期の西園寺流洞院家による丹後国衙経営を考慮し、京都からの搬入を想定している。なお、中野遺跡は「中世丹後国衙」（留守所）である可能性を示している（中嶌 2017）。また、小川信氏は中世の丹後府中を論じる中で中野遺跡の性格を「侍屋敷」と想定している（小川 2001）。

図１　遺跡位置図

なお、日本海側での貿易陶磁器の出土量の多さは従来から指摘されており（吉岡 1997）、日本海流通に伴う遺物として注目されてきた。近年には京都府北部を流れる由良川沿いに位置する大川遺跡（京都府舞鶴市）において、21 点の朝鮮半島産陶磁器が出土している。伊野近富氏らはこの点に着目し、同安窯系青磁と龍泉窯系青磁の比率

と朝鮮半島産陶磁器の２つの観点から日本海流通の存在を支持している（伊野 2015・2018、綾部・竹村・伊野 2017）。

以上のように、丹後地方を含めた日本海側の地域は、貿易陶磁器のまとまった出土が確認されている地域であり、日本海流通の関係性が論じられている。丹後府中についても中野遺跡の存在から、日本海流通と強く関係する地域として注目されてはいるものの、中野遺跡のみが検討の対象となっている。そこで、中野遺跡のみならず、府中地区の他の貿易陶磁器が一定量出土する遺跡についても貿易陶磁器の数量計測をおこない、中世前期の府中地区について貿易陶磁器の観点から検討する。

３．分析方法と対象遺跡

本稿では、中世前期の中国産の貿易陶磁器を対象とし、破片数計測法を用いて計測をおこなう。遺跡ごとの整理状況や遺物のランクなどによって接合の状況が異なることから、破片数は接合前の数量に統一した。分類の基準は主に大宰府における陶磁器分類（太宰府市教育委員会 2000、以下、大宰府分類とする）に拠る。貿易陶磁器の年代観については 山本氏による大宰府分類の以下の年代観（山本 2010）を参照する。

A 期　：８世紀末頃～ 10 世紀中頃
B 期　：10 世紀後半～ 11 世紀中頃
C 期　：11 世紀後半～ 12 世紀前半
D 期　：12 世紀中頃～ 12 世紀後半
E 期　：13 世紀初頭前後～ 13 世紀前半
F 期　：13 世紀中頃～ 14 世紀初頭前後
G 期　：14 世紀初頭～ 14 世紀中頃

なお、本稿では C 期から F 期を中心に検討するが、遺跡の全体像を把握するため、分類の対象は８世紀末～ 16 世紀までの中国産貿易陶磁器を計量の対象とする。なお、太宰府分類 G 期以降の貿易陶磁器については、森田 1982、上田 1982、吉岡 2012、瀬戸 2015 も参照した。数量計測の対象とした遺跡は、丹後府中遺跡群にあたる中野遺跡・国分寺隣接地遺跡・難波野遺跡の３遺跡と、京都府北部を流れる由良川流域に所在する大川遺跡の計４遺跡（図１）である。

（１）中野遺跡（京都府宮津市）

宮津市中野に所在する遺跡である。数量分析の対象とした資料は、1979 年から４年間にわたって丹後国分尼寺の候補地として実施された範囲確認調査で出土したものである。国分尼寺と確定できる遺物・遺構は確認されず、官衙関連施設を想定する説（東 2002）もある。背後に位置する成相寺と並んで中世丹後府中を考える際に重視されてきた遺跡である。

（２）国分寺隣接地遺跡（京都府宮津市）

宮津市国分に位置する。1979 年から 1995 年にかけて８回の範囲確認調査が実施されている。現存する礎石などは南北朝期に再建された国分寺のものであるが、古代の硯などの出土から、奈良時代

の国分寺もほぼ同じ場所に所在したと考えられる（東 2002）。

（3）難波野遺跡（京都府宮津市）

宮津市難波野付近に位置する。天橋立の北側に位置し、付近には丹後国一宮である籠神社がある。弥生時代～中世の遺跡として知られ、複数回にわたって発掘調査が実施されている。中世は集落であったとされるが、当遺跡の出土品の中には中世前期の上質な漆器椀が含まれる上、周辺の「神子屋敷」や「阿弥陀堂」、「荒神垣」、「北垣」、「大戸」などの籠神社関連施設や宗教施設、何らかの居館的なものがあったことを偲ばせる小字名が点在することから、籠神社との関連が想定されている。また、遺跡の北西隅については阿蘇海が入り込む海岸や湿地状の場所であったと確認されており、陸化して生活に利用できるようになったのは 13 世紀後半ごろであることが指摘されている（財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2008）。

（4）大川遺跡（京都府舞鶴市）

舞鶴市大川に所在する遺跡である。近年、由良川の河川改修工事に伴って広範囲にわたる面的な発掘調査が実施されている（公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2016）。弥生時代～室町時代にかけての遺構が検出される複合遺跡であり、平安時代後期～鎌倉時代にかけては集落の中心地であったと考えられる。由良川沿いに立地することや搬入品の出土状況から、由良川を介した流通の拠点としての性質を持つと考えられており、鍛冶工房の存在も想定されている（伊野 2018）。

４．各遺跡の出土傾向 （表１～３、図２）

（1）中野遺跡

中野遺跡では 734 点の貿易陶磁器が出土している。時期別の出土状況として、A 期には白磁碗Ⅰ類や越州窯系青磁碗・鉢が出土しており、古代において官衙的な性格を持つ施設があったことが想定できる。続く B 期の貿易陶磁も少量ではあるが出土が確認できる。この時期の貿易陶磁器の出土は丹後以外の地域でも非常に少なく、中野遺跡の特徴的な点であるといえる。その後、C・D 期になると急激に出土量が増加して中世前半期におけるピークを迎えるものの、E 期になると量が大きく減少している。ただし、E 期の資料も確認できるだけでも 32 点出土しており、中嶌氏も指摘するように 13 世紀中頃～ 14 世紀代にかけての「一定の出土」（中嶌 2017）が認められる。

出土遺物の内容については、器種が多岐にわたる。供膳具としては、C 期から D 期にかけて全国的にも広く出土する白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅷ類が大半を占める。ただし、青白磁の碗・皿や龍泉窯系青磁碗Ⅲ類なども出土しており、一般的な碗・皿以外にも、優品を受容していたことがわかる。供膳具以外には、白磁の壺や白磁・青磁の香炉なども出土している。

また、貿易陶器の盤や壺なども出土している。盤には緑釉と黄釉の２種類がある。粗製の貿易陶器は、細片が多く、時期が特定できないものが多いが、褐釉陶器の壺で 13 世紀～ 13 世紀中頃（大宰府分類壺Ⅳ２類）に比定できるものがある。鉢も１点出土しており、中嶌氏は出雲国府跡での類例品を提示している（中嶌 2017）。内容物が目的と考えられ、それ自体は商品としての価値を持たない

表１　白磁出土点数

		白磁															
No.	遺跡名	碗Ⅰ	碗Ⅺ	碗Ⅱ	碗Ⅳ	碗Ⅴ	碗Ⅴ or Ⅶ	碗Ⅶ	碗Ⅸ	その他碗	皿Ⅺ	皿Ⅸ	その他皿	壺・水注	合子・蓋	その他・不明	合計
1	中野遺跡	1	4	23	39	16	4	15	3	31	4	15	45	23	1	71	295
2	国分寺隣接地遺跡	1	0	16	20	4	0	0	0	16	4	2	12	6	1	23	105
3	難波野遺跡	0	0	49	59	11	24	5	2	219	0	21	70	19	3	9	491
4	大川遺跡	0	0	27	60	29	63	11	6	141	0	32	76	8	2	101	556

表２　青磁出土点数

		青磁															
No.	遺跡名	越磁	龍泉碗Ⅰ	龍泉碗Ⅱ	龍泉碗Ⅲ	龍泉鎬文直口碗	龍泉鎬文外反碗	龍泉細蓮弁文碗	龍泉稜花皿	龍泉鉢・盤	龍泉坏	龍泉碗	龍泉皿	同安碗	同安皿	その他・不明	合計
1	中野遺跡	4	41	32	3	19	28	26	19	14	12	115	1	12	11	31	368
2	国分寺隣接地遺跡	2	0	3	2	0	12	2	2	0	1	3	1	0	0	35	63
3	難波野遺跡	2	56	38	6	2	3	2	0	1	8	53	6	20	27	11	235
4	大川遺跡	0	37	48	6	9	22	3	1	2	18	135	26	25	17	36	385

表３　青白磁・陶器出土点数

		青白磁					その他						
No.	遺跡名	合子	碗・皿	その他	壺	合計	天目	鉄絵鉢	陶器盤	合子	粗製陶器	その他	合計
1	中野遺跡	1	9	9	1	20	4	1	4	0	42	0	51
2	国分寺隣接地遺跡	1	1	1	2	5	1	0	0	0	6	0	7
3	難波野遺跡	8	2	1	7	18	2	0	5	2	4	26	39
4	大川遺跡	4	10	13	2	29	3	0	0	0	6	0	9

粗製陶器の壺が多く出土することは、中野遺跡の特徴の１つに挙げられる。

このほか、大宰府分類 G 期以降の貿易陶磁器については青磁の碗が主体となっており、その他に青磁の皿、白磁の碗・皿が出土する。これらは、14 世紀前葉～ 16 世紀前半に至るまで継続して出土する。このほか、特徴的な遺物としては高麗青磁（中嶌 2017）や青磁盤が出土している。

（２）国分寺隣接地遺跡

国分寺隣接地遺跡では、180 点の貿易陶磁器が出土している。本稿の対象とする遺跡の中では、貿易陶磁器の出土量が最も少ない。A 期の貿易陶磁器が出土していることから、この一帯も中野遺跡

と同様、古代には官衙などの公的な施設があったと考えられる。C 期になると出土量が急増するが、D 期になると貿易陶磁器が突如として姿を消す。龍泉窯系碗Ⅰ類の不在は報告書でも指摘されていたが、同じく D 期に属する白磁碗Ⅴ－４類や碗Ⅷ類の口縁、もしくは底部内面の確認できる資料は見られず、D 期に大きな断絶が存在する。E 期以降については、量的には少ないが継続して出土が確認できる。

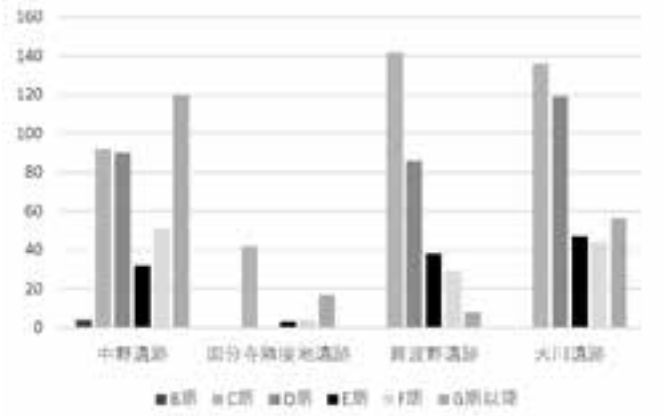

図２　時期別出土量推移

また、特徴的な出土遺物として貿易陶器が 6 点出土しており、粗製の壺類と考えられるが、細片であるため時期は特定できない。

（３）難波野遺跡

難波野遺跡で出土する貿易陶磁器は、今回の計測により貿易陶磁器が多量に出土する遺跡であることが明らかとなった。難波野遺跡で出土した貿易陶磁器は 783 点である。

時期ごとの出土傾向としては、A 期の越州窯系青磁が出土しており、B 期の断絶を経て C 期に出土量が急増する様子が確認できる。C 期における難波野遺跡の特徴的な点として、白磁碗Ⅱ類の出土率の高さがあり、同じ C 期の標準磁器とされる白磁碗Ⅳ類との比較してみると白磁碗Ⅱ類は 49 点、白磁碗Ⅳ類は 59 点で、比率は 0.83：1 である。中野遺跡は白磁碗Ⅱ類 23 点、白磁碗Ⅳ類 39 点で比率は 0.58：1、大川遺跡も白磁碗Ⅱ類 27 点、白磁碗Ⅳ類 60 点で比率は 0.45：1 と、白磁碗Ⅱ類の比率は両遺跡とも 0.5 に近い数字になることからも、難波野遺跡では白磁碗Ⅱ類が高い比率で出土することがわかる。

また、G 期以降に出現する無文外反碗をはじめとした青磁碗の出土量が非常に少ない傾向にあり、遺跡は 14 世紀中頃以降急速に衰退したと考えられ、中世後期以降の難波野遺跡一帯の活動は低調であったと言える。

以上、白磁碗Ⅱ類は特に C 期の前半に出土のピークがあり、白磁碗Ⅳ類よりもかなり早い段階で流入が停止する（赤松 2017）ことや白磁が全体の 6 割に上ることも考慮すると、難波野遺跡の貿易陶磁器搬入のピークは C 期の早い段階にある可能性が指摘できる。

出土遺物の内容については、一般的に出土する白磁碗やⅢなどの供膳具が大部分を占めている。しかし、一部には一般的な供膳具以外の品も含まれ、特徴的な器種としては、青白磁の小壺の蓋や碗、龍泉窯系青磁碗Ⅲ類や束口碗、建窯産の禾目天目、褐釉陶器盤などが挙げられる。青白磁合子の出土量も比較的多い。このほか、中世前期と考えられる白磁の壺・水注が出土している[(1)]。貿易陶器は粗製の壺類とみられる細片 4 点が出土する。貿易陶磁器の内容を見ると、一定量の優品が搬入され

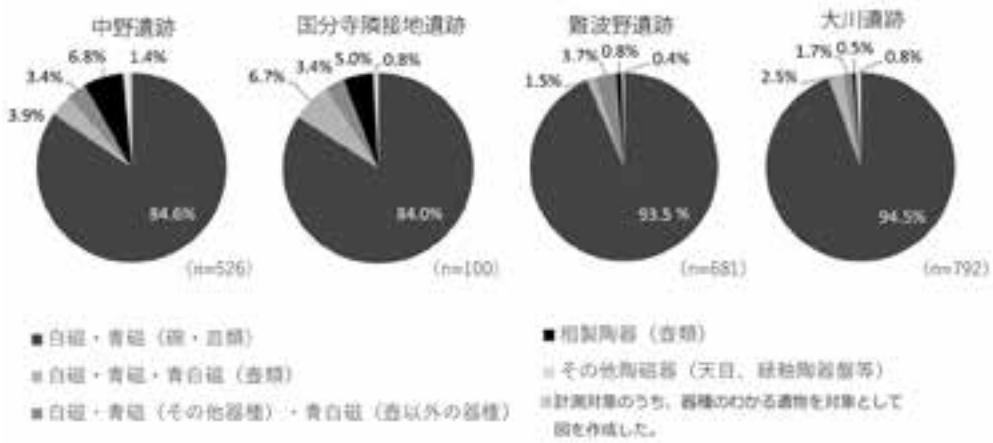

図３　貿易陶磁器種類別出土割合

ていることは確かである。

なお、平成 19 年度の調査で確認された遺構は 13 世紀後半を前後する頃の遺構であると報告されている。この調査の 12 トレンチで出土した多量の漆器椀も放射性炭素年代測定の結果、13 世紀後半のものとされており、他の遺構出土の土器や陶磁器から見ても、13 世紀後半を中心とする遺構であることは十分肯定できる。一方で、貿易陶磁器の量的なピークはＣ期にあり、調査で確認された建物等の時期以前から土地が利用されていた可能性も指摘しておきたい。

（４）大川遺跡

大川遺跡の貿易陶磁器は 979 点に上り、量的には本稿の対象とする遺跡の中で最も多い。この遺跡では、Ｃ期から貿易陶磁器の存在が確認でき、Ｃ・Ｄ期をピークとして、Ｅ期に出土量が減少するものの、Ｇ期以降にも一定数貿易陶磁器が出土している。

出土品の内容は白磁の碗や皿などといった一般的に出土する供膳具の他に、青白磁の碗や皿、白磁の蓋などが出土している。更に、特徴的な遺物として、朝鮮半島産陶磁器が 21 点出土している（公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2016）。その中には 12 ～ 13 世紀の高麗青磁の壺（伊野 2018）も含まれており、日本で出土する高麗青磁の中でも早い時期の品である。

以上の傾向を整理すると、大川遺跡では出土量と朝鮮半島産陶磁器の出土という２点で特殊性を見出すことができる。

（５）府中地区における貿易陶磁器の出土傾向について

府中地区に位置する難波野遺跡において、中野遺跡と匹敵する量の貿易陶磁器が出土していることが明らかとなった。中野遺跡は長期間にわたって貿易陶磁器を受容するのに対し、難波野遺跡については 75％以上をＣ・Ｄ期の陶磁器が占めることを勘案すると、当該時期の難波野遺跡においては中野遺跡と同等量もしくはそれ以上の陶磁器が持ち込まれた可能性があり、少なくともＣ・Ｄ期においては、難波野遺跡に優品を含む大量の貿易陶磁器を入手することができる集団が存在していたと考えられる[(2)]。

また、中野遺跡が他の府中地区の遺跡と比較して、種類において優位性が認められる点は従来の指摘通りである。器種がわかる遺物のうち、青磁・白磁の碗・皿類とそれ以外の比率は、中野遺跡と国分寺隣接地遺跡では碗・皿類が 84％程度であるのに対し、難波野遺跡と大川遺跡では 94％程度を碗・皿類が占めており、前者の出土遺物の多様さが表れている。このことから、中野遺跡は多量かつ多様な貿易陶磁器が搬入される流通と関係の強い場所であったと考えられる。一方で、中野遺跡からは中世の全時期を通じて貿易陶磁器が出土しており、粗製陶器の壺類などの流通に関係する遺物がどの時期に搬入されたかは、さらなる検討が必要である。

なお、府中地区に位置するいずれの遺跡においても、一般的に出土する白磁や青磁の碗・皿類に加えて、白磁の壺類や香炉、青白磁の碗・皿、粗製の陶器の壺類など、通常の集落では見られない種類、器種の陶磁器が出土している。阿蘇海の北側沿岸の一帯において、様々な種類の陶磁器が出土しており、多くの種類および量の陶磁器がこの地域に供給されていたと考えられる。

５．おわりに

本稿では、中世の府中地区を中心に、貿易陶磁器の数量的分析をおこなった。その中で、貿易陶磁器の組成から見ると中野遺跡が府中地区の中でも特異な遺跡であり、府中地区において流通に関係する遺跡である可能性が高いこと、難波野遺跡では 11 世紀後半から 12 世紀後半にかけての貿易陶磁器が多量に出土する遺跡であることが確認できた。出土量からは、難波野遺跡は中野遺跡に匹敵する遺跡と言うことができ、この時期の２つの遺跡の性格は、国産の他地域からの搬入品も含めて、検討する必要があるだろう。特に貿易陶磁器の中でも出土例の少ない優品や粗製陶器については、時期を明確に特定できず、各時期における貿易陶磁器の様相を十分に明らかにできなかった部分もあり、層序や遺構毎の検討など、時期別の様相を明らかにすることは今後の課題である。

謝辞

本稿は、平成 31 年度に提出した修士論文の一節を修正・改変したものです。本稿の執筆にあたり、資料見学について宮津市教育委員会様、舞鶴市教育委員会様、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター様にお世話になりました。記して感謝申し上げます。

註

（１） このほか、同一個体の可能性がある耳部の痕跡や堆線の見られる黄釉壺の細片を確認している。

（２） ２つの遺跡の調査面積は、それぞれ中野遺跡：1,416㎡、難波野遺跡：2,150㎡である。ただし、難波野遺跡出土の貿易陶磁器の 90％以上が９・12 トレンチ（1,337㎡）から出土している。

参考文献

赤松和佳 2017「京都出土輸入陶磁器の基礎整理」『中世土器研究会第 35 回大会資料』日本中世土器研究会

綾部侑真・竹村亮二・伊野近富 2017「日本海沿岸出土の貿易陶磁器」『京都府埋蔵文化財情報』第 131 号（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
伊野近富 2015「京都府内出土の輸入陶磁器」『京都府埋蔵文化財情報』第 128 号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
伊野近富 2018「京都府北部中世前期の土器・陶磁器―流通の中継地点と荘園館―」『中近世陶磁器の考古学』第８巻 佐々木達夫編 雄山閣
上田秀夫 1982「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』№.2 日本貿易陶磁研究会
小川　信 2001『中世都市「府中」の展開』思文閣出版
鋤柄俊夫 2006「丹後成相寺の土器と陶磁器」『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』吉岡康暢先生古希記念論集刊行会
瀬戸哲也 2015「14・15 世紀の沖縄出土中国産青磁について」『貿易陶磁研究』№.35 日本貿易陶磁研究会
中嶌陽太郎 2017「中野遺跡出土の貿易陶磁器と中世後期京都産土師器―中世丹後府中の考古学的解明に向けて―」『中近世陶磁器の考古学』第７巻 佐々木達夫編 雄山閣
東　高志 2002「古代寺院と国分寺」『宮津市史』通史編上巻
水澤幸一 2009「中世前期の貿易陶磁器」『日本海流通の考古学―中世武士団の消費生活―』高志書院
森田　勉 1982「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』№.2 日本貿易陶磁研究会
山本信夫 2010「貿易陶磁の分類・編年研究の現状と課題」『貿易陶磁研究』№.30 日本貿易陶磁研究会
吉岡康暢 1997「新しい交易体系の成立」『考古学による日本歴史９ 交易と交通』大塚初重・白石太一郎・西谷正・町田章編 雄山閣
吉岡康暢 2012「14・15 世紀中国陶磁編年の論点―琉球出土陶磁を中心に―」『中近世土器の基礎研究』24 日本中世土器研究会

報告書

（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2016「大川遺跡」『京都府遺跡調査報告集』第 164 冊
（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2008「難波野遺跡・大垣遺跡・一の宮遺跡 平成 18・19 年度発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第 128 冊
太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊ＸＶ―陶磁器分類―』太宰府市の文化財第 49 集
宮津市教育委員会 1980「中野遺跡第１次発掘調査概要」『宮津市文化財調査報告２』
宮津市教育委員会 1981「中野遺跡第２次発掘調査概要」『宮津市文化財調査報告３』
宮津市教育委員会 1982「中野遺跡第３次発掘調査概要」『宮津市文化財調査報告５』
宮津市教育委員会 1983「中野遺跡第４次発掘調査概要」『宮津市文化財調査報告７』
宮津市教育委員会 1989「史跡丹後国分寺跡隣接地遺跡発掘調査概要」『宮津市文化財調査報告 17』
宮津市教育委員会 1990「史跡丹後国分寺跡隣接地遺跡第３次発掘調査概要」『宮津市文化財調査報告 19』
宮津市教育委員会 1991「史跡丹後国分寺跡隣接地遺跡第４次発掘調査概要」『宮津市文化財調査報告 22』
宮津市教育委員会 1993「史跡丹後国分寺跡隣接地遺跡発掘調査概要」『宮津市文化財調査報告 26』
宮津市教育委員会 1994「史跡丹後国分寺跡隣接地遺跡第６次発掘調査概要」『宮津市文化財調査報告 27』
宮津市教育委員会 1995「史跡丹後国分寺跡隣接地遺跡発掘調査概要」『宮津市文化財調査報告 28』